

令和2年度病虫害発生予報第4号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量	作物名	病虫害名	予想発生量
水 稲	葉いもち (早・短期栽培)	並	果樹の 共通害虫	カメムシ類	多
	(普通期栽培)	並		吸蛾類 (アカエグリバ、ヒメエグリバ)	並
	穂いもち (早・短期栽培)	並	露 地 キュウリ	べと病	並
	斑点米カメムシ類	やや多		炭疽病	やや多
	ツマグロヨコバイ	やや少		褐斑病	並
	セジロウンカ	やや多		うどんこ病	並
ヒメトビウンカ	並	斑点細菌病	やや少		
縞葉枯病	やや多	モザイク病	やや多		
カンキツ	そうか病	並	ミナミキイロアザミウマ	並	
	黒点病	並	青 ネ ギ	べと病	やや少
	ミカンハダニ	やや少		黒斑病	並
	ミカンサビダニ	やや多		疫病	並
	ゴマダラカミキリ	やや多		軟腐病	多
ミカンハモグリガ	並	ネギハモグリバエ	並		
モ モ	せん孔細菌病	やや多	イチゴ (育苗床)	炭疽病	並
	褐さび病	やや少	うどんこ病	並	
	ハダニ類	やや多	露地キク	白さび病	並
	モモハモグリガ	やや少	野菜、花 きの共通 害虫	アブラムシ類	やや多
シンクイムシ類 (ナシヒメシンクイ、モ モノゴマダラノメイガ)	並	アザミウマ類 (主にネギアザミウマ)		やや多	
カ キ	炭疽病	並		シロイチモジヨトウ	やや多
	落葉病	並		タバコガ類	やや多
	うどんこ病	並	ハダニ類	やや多	
カキノヘタムシガ	並	ハモグリバエ類 (トマトハモグリバエ、 マメハモグリバエ)	やや多		
フジコナカイガラムシ	並				
ブ ド ウ	べと病	やや少			

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

令和2年度 病害虫発生予報 第4号 (7月)

A. 水稻の病害虫

1. 葉いもち

予 想 発生量 : 早・短期栽培 : 並
普通期栽培 : 並

根 拠 (1) B L A S T A M (いもち病発生予察システム) による6月の感染好適日の出現頻度は平年並であった。(±)

(2) 6月中旬の早・短期栽培での発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(3) 7月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) いもち病対象の箱施薬または本田防除を行っていない圃場で、発生を認める場合は早急に薬剤防除を行う。

(2) 箱施薬を行っている圃場においても、発生状況に注意し、上位葉への進展が認められる場合には、追加防除を行う。

2. 穂いもち (早・短期栽培)

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 出穂期に当たる7月の葉いもちの発生量は平年並の予想である。(±)

(2) 7月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 今後の葉いもちの発生状況に注意して、止葉に病斑の進展が認められる場合には出穂期に必ず薬剤防除を行う。

3. 斑点米カメムシ類

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 6月中旬の早・短期栽培水稻の畦畔雑草でのすくい取り調査では、大型のカメムシ5種(ホソハリ、クモヘリ、シラホシ、トゲシラホシ、ミナミアオ)、カスミカメ類2種(アカスジ、アカヒゲホソミドリ)の発生量はともにやや少なかったが(－)、そのうちのミナミアオカメムシの発生量は多かった(+)。

(2) 綾歌郡綾川町の高圧水銀灯における5月第5半旬から6月第5半旬のミナミアオカメムシの誘殺数は、過去9か年の平均に比べ多かった。(+)。

(3) 7月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 出穂の早い圃場には集中的に飛来するおそれがあるので注意する。

(2) 畦畔等圃場周辺の除草を行い、カメムシ類の発生源を少なくする。ただし、出穂直前に行うと、カメムシ類の圃場への移動をうながすことになるので、雑草の刈り取りを行う場合は、出穂7～10日前に行う。また、休耕地はミナミアオカメムシの繁殖場所になるので、耕起等によって雑草の少ない状態を保つ。

(3) 薬剤防除の時期は、液剤や粉剤等の場合は出穂期頃とその10～15日後であり、粒剤の場合は7日程度早めて処理する。なお、穂揃期以降にミナミアオカメムシが水稻で繁殖している場合は、粒剤よりも速効的で効果が高いとされる液剤や粉剤の使用が望ましい。

(4) 防除効果を高めるために、地域一斉防除に努める。

(5) ミナミアオカメムシ以外のカメムシ類に対しては、圃場周縁部のみの薬剤防除でも防除効果はある。

4. ツマグロヨコバイ

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 6月中旬の早・短期栽培での発生を認めなかった。(－)
(2) 綾歌郡綾川町の高圧水銀灯での6月の誘殺数は、過去9か年の平均に比べやや少なかった。(－)

対 策 出穂期以降の密度増加により、すす症状の現れる圃場もあるため、ツマグロヨコバイ対象の防除薬剤が入っていない圃場では、発生状況に注意しつつ本田での薬剤防除を実施する。

5. セジロウンカ

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 6月中旬の早・短期栽培での発生量は多かった。(＋)
(2) 綾歌郡綾川町の高圧水銀灯での第1世代成虫の誘殺数は過去9か年の平均に比べやや多かった。(＋)

対 策 飛来成虫の産卵による葉鞘の変色に注意し、変色が目立つ圃場では、定期的に払い落とし調査を行い、幼虫が10株あたり300頭を超えた時点で薬剤防除する。

6. ヒメトビウンカと縞葉枯病

予 想 発生量 : ヒメトビウンカ : 並
縞葉枯病 : **やや多**

- 根 拠 (1) 6月中旬の早・短期栽培でのヒメトビウンカの発生量はやや少なかった。(－)
(2) 綾歌郡綾川町の高圧水銀灯での第1世代成虫の誘殺数は過去9か年の平均並であった。(±)
(3) 6月中旬の早・短期栽培での縞葉枯病の発生量は平年並であった。(±)
(4) 近年、ヒメトビウンカの保毒虫率及び縞葉枯病の発生が増加傾向にある。(＋)

対 策 (1) 縞葉枯病の発生の多い地域で、ウンカ、ヨコバイ類対象の育苗箱施薬を行っていない圃場では、本田初期にヒメトビウンカ対象に薬剤防除を行う。普通期栽培での防除適期は7月上中旬である。
(2) 本田初期の発病株は2次伝染を引き起こすため、抜き取って処分する。

B. 果樹の病害虫

－カンキツ－

1. そうか病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場での6月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 一般圃場での6月中旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(3) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発病した夏梢、葉、果実は早めに切除し、適正に処分する。
(2) 樹勢を健全に保ち、防風対策を行う。

2. 黒点病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場での6月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 一般圃場での6月中旬の発生は認めなかった。(－)
(3) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 伝染源である枯枝は切除し、適正に処分する。
(2) 薬剤散布は、梅雨の合間をみて早めに行う。梅雨明けまでは固着性の高い展着剤を加用する。

3. ミカンハダニ

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 一般圃場の6月中旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 100葉調査で、1葉当たりの寄生雌成虫数が0.5～1頭になれば防除する。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

4. ミカンサビダニ

予 想 発生量 : やや多

- 根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量は平年並であった。(±)
(2) 7月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 7月に入ると果実での増殖が盛んになるので、ミカンハダニとかねて7月中旬に防除する。

5. ゴマダラカミキリ

予 想 発生量 : やや多

根 拠 一般圃場での6月中旬の発生量は多かった。(＋)

- 対 策 (1) 圃場内を見回り、成虫を捕殺する。
(2) ふ化した幼虫の食入期(7月中下旬)に、圃場内を見回り、木屑が出ている箇所にいる幼虫を刺殺する。
(3) 産卵防止およびふ化幼虫の食入防止のため、7月上旬～下旬に主幹から株元に薬剤散布を実施する。

6. ミカンハモグリガ

予 想 発生量 : 並

根 拠 一般圃場での6月中旬の発生量は平年並であった。(±)

- 対 策 夏芽の発生が多い圃場では、新梢伸長期に防除する。

ーモ モー

1. せん孔細菌病

予 想 発生量 : やや多

- 根 拠 (1) 県予察圃場での6月の発生量はやや多かった。(＋)
(2) 一般圃場での6月中旬の発生量は平年並であった。(±)
(3) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

- 対 策 (1) 発病枝は伝染源となるので、見つけしだい除去し処分する。
(2) 病原菌は葉や果実の気孔、水孔等や傷口から侵入するので、風当たりの強い圃場では防風ネット等の防風対策を施す。
(3) 発生の多い園地では、追加防除する。

2. 褐さび病

予 想 発生量 : やや少

- 根 拠 (1) 県予察圃場での6月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 一般圃場での6月中旬の発生は認めなかった。(－)
(3) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 枝の病斑が最大の伝染源であるので、見つけしだい発病葉とともに切り取り適正に処分する。

3. ハダニ類

予 想 発生量 : やや多

根 拠 (1) 一般圃場での6月中旬の発生量はやや多かった。(+)
(2) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発生が多い圃場では防除する。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤の使用は年1回とする。

4. モモハモグリガ

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 県予察圃場での6月の発生量は平年並であった。(±)
(2) 一般圃場での6月中旬の発生は認めなかった。(－)
(3) 県予察圃場フェロモントラップでの5～6月の誘殺は認めなかった。
(－)

対 策 (1) 発生が多い圃場ではシンクイムシ類とかねて防除する。
(2) 収穫後も発生に注意し、被害葉が散見される圃場では防除する。
(3) 交信攪乱剤を設置している圃場においても、効果期間終了後の発生に注意する。

5. シンクイムシ類 (ナシヒメシンクイ、モモノゴマダラノメイガ)

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) ナシヒメシンクイの県予察圃場での6月の芯折れ被害の発生量は多く
(+)、フェロモントラップの誘殺数はやや多かった (+)。
(2) ナシヒメシンクイの一般圃場での6月中旬の芯折れ被害の発生量はやや少
なかつた。(－)
(3) モモノゴマダラノメイガの県予察圃場予察灯での誘殺数はやや少なかつ
た。(－)
(4) モモノゴマダラノメイガの一般圃場での6月中旬の発生は認めなかった。
(－)

対 策 (1) 定期的な薬剤防除を実施する。
(2) 発生が多い場合は、2、3日おきに園内を見回り、萎凋初期の被害新梢を
切除する。
(3) 樹上及び地面に落果した被害果は適正に処分する。

－カ キー

1. 炭疽病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 一般圃場での6月中旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
(2) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 圃場内をよく観察して、発病枝は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出し
適正に処分する。特に前年多発生した圃場では、発病枝の発生に注意する。
(2) 授粉樹など、樹高が高く、剪定や粗皮削り等の管理作業を実施していない
樹の周辺、採光や通風の悪い場所、降雨が多い場合では、発生が増加するこ
とがあるので注意する。
(3) 薬剤はかけむらのないよう丁寧に散布する。降雨が続く場合は、降雨の合
間に散布する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 落葉病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量は平年並であった。(±)
(2) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 昨年発生が多かった圃場では、7月上～中旬に葉裏に薬剤が十分付着するよう散布する。

3. うどんこ病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での6月の発生量は多かった。(+)
(2) 一般圃場での6月中旬の発生量は少なかった。(－)
(3) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発病が進むと防除効果が劣るので早めに薬剤防除を実施する。
(2) 落葉した葉はできるだけ早く処分する。

4. カキノヘタムシガ

- 予 想 発生時期 : やや遅い
発生量 : 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場での越冬世代成虫の発生時期はやや遅く、発生量はやや少なかった。(－)
(2) 県予察圃場での6月下旬の被害量は少なかった。(－)
(3) 一般圃場での6月中旬の発生量は多かった。(＋)
- 対 策 (1) 第1世代成虫最盛期の7～10日後(8月上旬頃)に防除する。
(2) 防除を実施したにも関わらず、被害が続く場合には追加防除を行う。

5. フジコナカイガラムシ

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 一般圃場での6月中旬の発生量は平年並であった。(±)
- 対 策 (1) 6月に本虫を対象に防除を行っていない圃場では、早急に防除する。
(2) 薬剤が幼果のがく部に充分付着するように散布する。

—ブドウ—

1. ベと病

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠 (1) 一般圃場での6月中旬の発生は認めなかった。(－)
(2) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水に努める。
(2) 被害葉は見つけしだい除去し処分する。
(3) 薬剤防除は降雨の前後に重点をおく。

—果樹の共通害虫—

1. カメムシ類

- 予 想 発生地域 : 県下全域、特に山林隣接圃
発生量 : **多**(令和2年5月22日付け注意報第2号発表)
- 根 拠 (1) 県予察圃場予察灯の誘殺数は多かった。(＋)
(2) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) ナシ、モモ、カキ、キウイフルーツ、ブドウ等は、幼果期から被害を受ける場合があるので、有袋栽培では、できるだけ早く袋かけを行う。

- (2) 施設栽培の場合は、開放口をネット（4mm目合い）で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。
- (3) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に防除を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
- (4) 多発してからの防除は効果が劣る場合があるので、発生初期の防除を徹底する。
- (5) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
- (6) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシ類には効果がないので注意する。
- (7) 防除薬剤は、地域の病害虫防除暦等を参考にする。
- (8) 作物によって、登録のある薬剤が異なるので、使用にあたってはラベルをよく読んで、登録の有無や収穫前日数、使用回数等使用基準を遵守する。

2. 吸蛾類（アカエグリバ、ヒメエグリバ）

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 県予察圃場予察灯における6月の誘殺数は平年並であった。(±)
- 対 策 (1) 熟果及び裂果などを早めに取り除き、適正に処分する。
- (2) 被害の多い場合は、夜間の捕殺、網掛け、黄色蛍光灯などで

C. 野菜、花きの病害虫

一露地キュウリー

1. ベと病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 6月下旬の発生量はトンネル栽培キュウリでは平年並(±)、夏キュウリではやや多かった(+).
- (2) 7月の気象は気温が高く(-)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、肥料切れに注意し、樹勢が衰えないように栽培管理する。
- (2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
- (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 炭疽病

- 予 想 発生量 : やや多
- 根 拠 (1) 6月下旬の発生量はトンネル栽培キュウリではやや多く(+)、夏キュウリでは平年並(±)であった。
- (2) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
- (2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (3) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
- (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 褐斑病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 6月下旬のトンネル栽培キュウリでの発生は認めず(－)、夏キュウリでの発生は平年と同様に認めなかった(±)。
(2) 7月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 耐病性品種を用いる。
(3) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(4) 薬剤散布は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすように努める。
(5) 薬剤防除は、炭疽病を対象に実施すれば本病にも効果がある。
(6) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. うどんこ病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 6月下旬のトンネル栽培キュウリでの発生は認めず(－)、夏キュウリでの発生量はやや多かった(+)
(2) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 耐病性品種を用いる。
(3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で実施する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. 斑点細菌病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 6月下旬の発生はトンネル栽培キュウリでは平年と同様に認めず(±)、夏キュウリでは発生を認めなかった(－)
(2) 7月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに過繁茂にならないよう栽培管理する。
(2) 整枝、誘引等を適切に行うとともに、老化葉や病斑の多い葉を除去し、通風を図る。除去した葉は圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。曇雨天が続くような場合に発病を認めたら適宜防除する。

6. モザイク病

予 想 発生量 : やや多

根 拠 (1) 6月下旬のトンネル栽培キュウリでの発生は認めず(－)、夏キュウリでの発生量は多かった(+)
(2) 6月下旬のアブラムシ類の発生量は、トンネル栽培キュウリではやや少なく(－)、夏キュウリでは平年並であった(±)。

対 策 (1) アブラムシ類の防除を行う。
(2) 発病株は、早期に抜き取り圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) 収穫用具の消毒をする。

7. ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 6月下旬の夏キュウリでの発生は認めなかったが、一部地域で発生がやや多かった。(±)

- (2) 7月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 光反射資材や防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 施設の発生圃場では、栽培終了後、施設を密閉し死滅させる。
- (4) 本虫が媒介する黄化えそ病の発生地域では、本虫を対象に定植時に必ず粒剤または灌注処理し、定期的に薬剤防除を実施する。発病株を認めたら早急に地上部を除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
- (5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－青ネギー

1. ベと病

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠 (1) 6月下旬の発生は認めなかった。(－)
- (2) 7月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 窒素質肥料は適切に施用し、草勢を良好に保つ。
- (2) 排水不良になると発病を助長するので、圃場の排水をよくする。
- (3) 発生を確認した場合は直ちに薬剤防除を行う。
- (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 黒斑病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 6月下旬の発生量は平年並であった。(±)
- (2) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 肥料不足になると発病しやすいので、適正施肥を行う。
- (2) 排水不良になると発病を助長するので、圃場の排水をよくする。
- (3) 発生を確認した場合は直ちに薬剤防除を行う。
- (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 疫病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 6月下旬の発生量は平年並であった。(±)
- (2) 7月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
- (2) 発生の多い圃場では菌密度が高くなっているため、圃場を変えるか土壌消毒を実施する。
- (3) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。
- (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. 軟腐病

- 予 想 発生量 : 多
- 根 拠 (1) 6月下旬の発生量は多かった。(＋)
- (2) 7月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 発生の多い圃場では菌密度が高くなっているため、圃場を変えるか土壌消毒を実施する。
- (2) 窒素質肥料の多用しないよう肥培管理する。
- (3) 圃場の排水を良くし、水を長期間停滞させないようにする。
- (4) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。

5. ネギハモグリバエ

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 6月下旬の発生量はやや少なかった。(－)

(2) 7月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。

(2) 摘葉した残さや、収穫終了後の茎葉は次作の発生源になるので、土中に埋めるか、古ビニール等で被覆するなど、適正に処分する。

(3) 多発してからの防除は困難であるので、発生の兆しが見られたら早めに防除する。

(4) 定植時には育苗トレイ灌注または粒剤施用をする。

－イチゴ（育苗床）－

1. 炭疽病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 6月下旬の育苗床では平年と同様に発生を認めなかった。(±)

(2) 7月の気象は気温が高い予報である。(＋)

対 策 (1) 発病株は見つけしだい除去し、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

(2) 水滴の飛散等で伝染するので、発病が見られる圃場では、灌水の跳ね返り等がないように注意する。

(3) 仮植（苗の親株からの切除）前の防除を徹底する。

(4) 予防剤を定期的に散布し、発生が見られたら治療効果のある薬剤を散布する。

(5) QoI剤（ストロビルリン系剤）に対して耐性菌が確認されているので注意する。

2. うどんこ病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 育苗床での6月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(＋)

(3) 7月の気象は気温が高い予報である。(－)

対 策 (1) 本病は葉裏に発生することが多いので、こまめに観察して早期発見し、薬剤は葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(2) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。曇雨天が続き、急増が予想される場合には、治療効果のある剤を主体に5～7日間隔で防除を行う。

(3) 伝染源を絶つため、子苗（ランナー）を切り離れた後、親株は早期に除去し処分する。

(4) 草勢が衰えたり、窒素肥料の過多や葉が混み合うと多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。

(5) 7～8月の高温期になると白い粉状の分生胞子は見られなくなるが、病原菌は残存しているので、本圃へ発病株を持ち込まないように発病葉は可能な限り除去するとともに、育苗床での防除を徹底する。

(6) 耐性菌の発生を防ぐために、同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。散布回数が多くなることから、各薬剤の使用回数及び収穫前日数を遵守する。

－露地キク－

1. 白さび病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 6月下旬の発生量は平年並であった。(±)

- (2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(+)
 (3) 7月の気象は気温が高く(－)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理をする。
- (2) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で実施し、曇雨天が続くような場合には防除間隔を短縮する。発生が多い場合にはクレソキシムメチルフロアブル等の治療剤を用いる。
- (3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－野菜、花きの共通害虫－

1. アブラムシ類

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 6月下旬の発生量はトンネル栽培キュウリではやや少なく(－)、夏キュウリでは平年並(±)、イチゴの育苗床ではやや多かった(+)。また、一部地域の野菜、花きで発生がやや多かった(+)。
- (2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での6月のアブラムシ類の誘殺数は、過去9か年の平均に比べやや少なかった。(－)
- (3) 7月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 今後作付を行う場合は、光反射資材や防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。
- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 育苗期から生育初期に粒剤等を施用する。なお作物の種類に応じて農薬登録の適用に配慮する。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. アザミウマ類(主にネギアザミウマ)

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 6月下旬の発生量は青ネギでは平年並(±)、トンネル栽培キュウリ、夏キュウリともにやや少なかった(－)。
- (2) 防除員報告では、発生量のやや多い地区があった。(+)
 (3) 7月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 野菜類及び花き類ではネギアザミウマの吸汁により、ウイルス病(ネギえそ条斑病等)が媒介される場合や食害痕から病原菌が侵入する場合がありますので、食害が認められる場合は早期に防除を行う。
- (2) 施設栽培では青色粘着トラップ等を利用して発生状況を確認し、発生が多い圃場では防除を行う。青ネギでは葉にわずかなカスリ状の食害痕が見られる場合に、アスパラガスでは、圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程度の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。
- (3) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵が新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
- (4) 露地栽培ではシルバーマルチ、施設栽培では目合が1mm以下のネット被覆することや周囲に乱反射シートを敷設することで飛び込み量を減らすことができる。
- (5) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (6) 抵抗性発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

3. シロイチモジヨトウ

予 想 対象作物 : 青ネギ、アスパラガス、キク、カーネーション等
発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 6月下旬の青ネギでの発生は認めなかった。(－)
 (2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの誘殺数は、過去9か年の平均に比べ多かった。(＋)
 (3) 7月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. タバコガ類

予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 6月下旬の発生量はトンネル栽培キュウリでは平年並(±)、夏キュウリではやや多かった(＋)。
 (2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの誘殺数は、過去9か年の平均に比べオオタバコガはやや少なく(－)、タバコガは多かった(＋)。
 (3) 防除員報告では、丸亀市飯山町のフェロモントラップでのオオタバコガの誘殺数は多かった。(＋)
 (4) 7月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 花蕾や生長点を食害するので被害が見えたら直ちに薬剤防除を行う。
 (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

5. ハダニ類

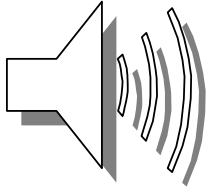
予 想 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 6月下旬の発生量はトンネル栽培キュウリ、夏キュウリ、イチゴともにやや少なかったが(－)、一部地域の野菜、花きで発生がやや多かった(＋)。
 (2) 7月の気象は気温が高く(＋)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 発生が局所的な場合には、スポット散布を行う。
 (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

6. ハモグリバエ類(トマトハモグリバエ、マメハモグリバエ)

予 想 対象作物 : キュウリ、トマト、ミニトマト、ナス、キク等
 発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 6月下旬の発生量はトンネル栽培キュウリではやや多く(＋)、夏キュウリでは少なかった(－)。
 (2) 7月の気象は気温が高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 施設栽培では防虫ネットを張るなどして侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 摘葉等によって生じた残さ(葉)や栽培終了後の放置株は、次世代の発生源になるので適正に処分する。
 (4) 施設の発生圃場では、栽培終了後、後作まで20日以上何も植えず施設を密閉し死滅させる。
 (5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない



6月～8月は、農薬危害防止運動月間です。

農薬の使用が増える時期ですので、今一度、農薬を適正に使用できているか、チェックしましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>